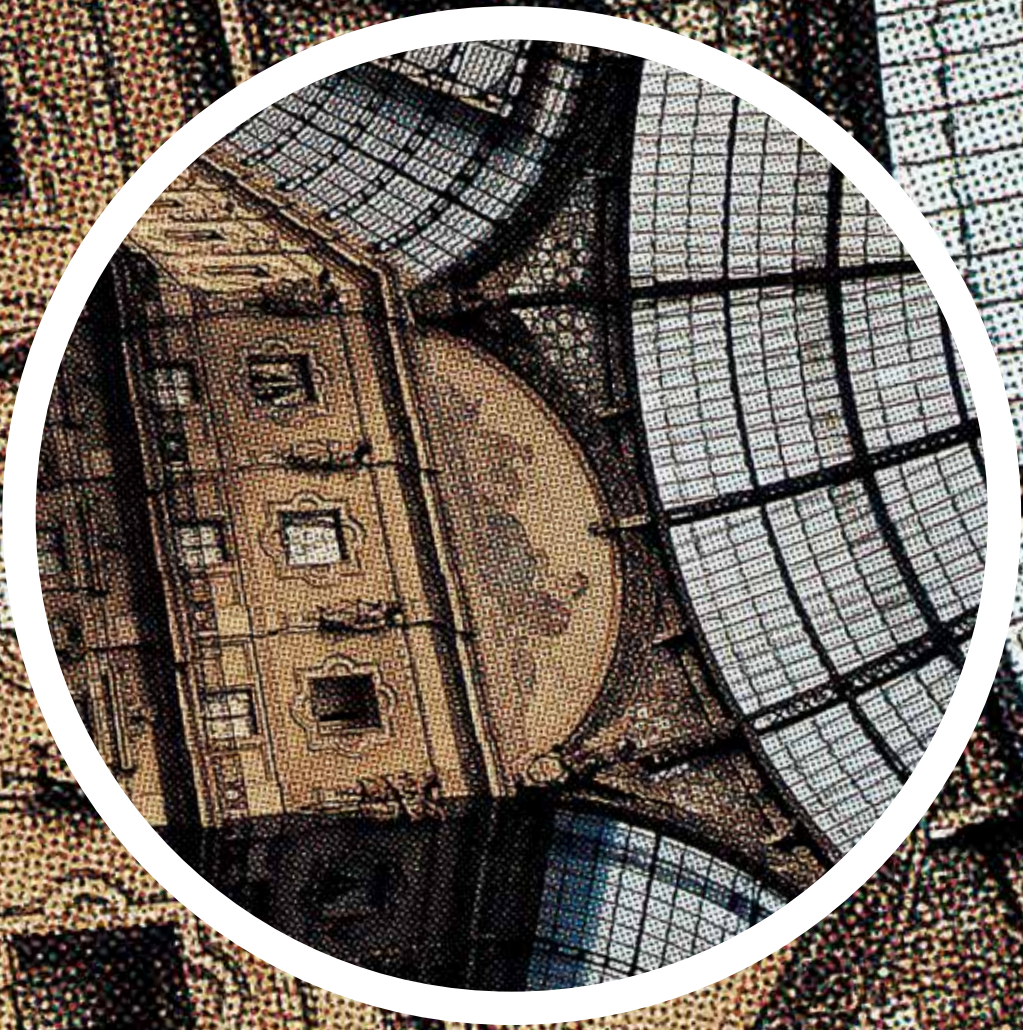




aaca
2025.05

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

no.

101

目次

- ・OPINIONS: 共鳴[7]
共鳴を誘う「美しさ」、
クリエイティブは美意識を礎に ————— 1-2
松井龍哉 (ロボットデザイナー、美術家)
- ・特集: AACA賞
AACA賞の今、これから ————— 3-5
古谷誠章 (第34回AACA賞選考委員長)
東條隆郎 (aaca会長、第34回AACA賞選考委員)
- [第34回AACA賞] クライアントの立場から
アートは感受性のスイッチ ————— 6
横手喜一 (ポーラ・オルビスホールディングス 代表取締役社長)
- [第34回AACA賞] 建築家の立場から
建築とアートが溶け合う関係をつくる仕組み ————— 7-9
安田幸一 (安田アトリエ: 個人会員)
- [第34回AACA賞] アート・ディレクターの立場から
ポーラ 青山ビルディング アート・プロジェクト ————— 10-11
村井久美 (TAKプロパティ: 個人会員)
- ・素材を知る[4] 繊維
タペストリーからファイバーアートへ ————— 12-13
中野恵美子 (元東京造形大学教授: 個人会員)
- ・七福神巡り2025 ————— 14
[情報文化研究委員会] 中島三枝子 (委員)
- ・2025年aaca新春の集い ————— 15
[総務委員会] 中野恵美子 (委員)
- ・第1回aaca建築・美術・工芸作品展 ————— 16-17
[展覧会委員会] 飯田郷介 (委員長)、齋藤卯乃 (副委員長)、
岡本直枝 (副委員長)
- ・第208回aacaフォーラム: パブリックアートの今 ————— 18
[フォーラム委員会] 市村陽子 (副委員長)
- ・『市中の山居ー共に創る時代へー』発行にあたり:
本研究の意義を振り返る ————— 19
[情報文化研究委員会] 高橋圭太郎 (委員長)
- ・パーセントフォーアートを知ろう ————— 20
[パーセントフォーアート研究委員会] 高橋章夫 (委員長)
- ・私が思うaaca的空間 ————— 21
◎ アクティビティとの出会い
近田玲子 (照明デザイナー: 個人会員)
◎ ルイジアナ近代美術館
山本茂義 (建築家(久米設計): 法人会員)
- ・協会ニュース ————— 22-23

共鳴を誘う「美しさ」、クリエイティブは美意識を礎に

松井龍哉 ロボットデザイナー、美術家

あらゆるクリエイティブにおいて美意識がその重要な核になるという松井氏。背景に潜む物語を社会や対象へと響くよう「形」へと展開することで「共鳴」を創出してきた松井氏の活動を概観しながら、「美しさ」が生む共鳴のありかたを考察していただきました。

21世紀、その先の22世紀を思い描きつつ

ロボットの世界へと足を踏み入れるまで、僕はずっと「21世紀を代表するものなるのはなんだろう」と探していました。大学では情報系のデザインを学び、都市をテーマに今で言うインフォグラフィックスを制作、丹下健三先生の事務所で建築のような実空間を対象にしながら、情報ネットワークとかかわりを持つリアルな存在を対象としてデザインするものを長い間探していました。

1998年、パリで、自律移動型ロボットによる競技会「RoboCup 98 Paris」(第2回世界大会)と出会ったとき、自分がずっとやりたかったことはロボットなのだと感じました。ダ・ヴィンチもル・コルビュジエも、今の時代に生きていたら絶対ロボットのデザインに興味を持つだろう、と。ダ・ヴィンチが飛行機を夢見たように、ル・コルビュジエがサヴォア邸で車社会の到来を想定していたように、21世紀につくるべきものはロボットではないか、いや、ロボットしかないと思いました。20世紀は車とコンピュータは社会を変革する新しい産業だった。そして今は情報がすごく重要になっていて、22世紀から見たらロボットや人工知能、生物学は21世紀を築いた産業の要になっていると考え、歴史的なチャレンジが出来ると思いました。

デザインとは、共通の美意識をつくること

人が使うものの美しさは、用途をど真ん中に据えることに尽き、ロボットのデザインにおける「美学」もそこにあります。その際に重要になってくるのは、「環境」「人」「テクノロジー」の関係を空間的にとらえながらロボットをデザインしているかどうかです。人間が使って本当に気持ちがいいものなのか、幸せな人間の空間にロボットがいるというインタラクティブな環境が創出されているかどうかなんです。

もちろん、機械として性能よく動くことは大前提となりますが、それよりもっと大事なものは、生活の中でそれが本当に必要とされているのか、ロボットがいることで昨日より今日のほうがよい世界に思えるか。そういうことになっていないと無理があると思いますね。

これは工業デザインでも建築でも、社会あるいは対象に対してしっかりと響くことが求められるデザインにおいて必要なことだと思うのです。

そしてデザインとは、ごちゃごちゃとした世の中を少し整理する仕事であり、そこに関わる人たちが納得できる共通の美意識の作り方だと考えています。美のルールのようなものです。これからの時代を考えると、市場開発的発想に加えこうしたデザインの視点は不可欠です。力学に基づいた技術的な美しさと、社会が求めているものと双方を持つものを、美意識のもとにつくっていくところまで考えていくべきだし、それを見出していくのもデザインの重要な仕事ではないかと考えています。



左から、Posy, Platina, Patin ©Flower Robotics

バウハウスの精神を美意識情勢の手掛かりに

そんな考えを背景に提案し実現したのがシェアオフィスのビル「axle(アクスル) 御茶ノ水」です。トヨタの社員寮だったスペースをスタートアップを立ち上げた人たちがその先に行けるよう起業や事業の創出をサポートするインキュベーションスペースで、コンセプトは「バウハウス2.0」。バウハウスの「技術と芸術の融合」という観点はエンジニアの方々にも響きやすく、施設のオープンがちょうどバウハウス100周年と重なったこともありました。



axle 御茶ノ水 ©トヨタ不動産/Flower Robotics

重要視したのは「美意識」です。スタートアップの人たちは志も高くものづくりにおいても相当に秀でているものの、「美意識」が欠けていると思うことが多々あります。日本ではもはや、「技術で世界を制覇する」「上場してスケールビジネスをする」という時

代に関わる観点だけではなく、勝負の際にはどこにもできない美しいものといった観点を持つべきです。

しかも、「デザイン」という言葉はものづくりとも経営戦略とも実はとても相性がいい。特にミース・ファン・デル・ローエの「Less is more (少ないほど豊かである)」は経営戦略にも響くし、理念と形態が合理的に一致します。ですので、「axle」ではその空間をきっかけにデザインを自然と意識する場をつくりたいと構想しました。家具はバウハウス所縁のものを選び、人が集まる要所要所にバルセロナチェアなどのミースの椅子やバウハウスの本を置きながら、自然と人が集まるような「溜り場」をつくりました。デザインに触れ、美しさを体感することで世界を見る目がちょっと変わってほしいと思ったからです。

千年に亘る歴史と千年後の未来に思いを巡らせ

「axle」の直後に立ち上がったのが平等院に現代美術を奉納しようという「奉納プロジェクト」と50年後、1000年後のロボットデザインを手掛けるという今回の大阪・関西万博のプロジェクトでした。おかげで千年も前の想いと、千年後のイメージの中を行ったり来たりするという、濃縮なクリエイティビティに満ちた時間を過ごすことになりました。

「奉納プロジェクト」では国宝をはじめ最高峰の工芸品の数々に触れることができ、その時代の最高の技術を使ったものが歴史をつくり、歴史の証拠にもなっていくのだと痛感。あらためて日本美術を真剣に勉強するいい機会を得て、日本に対する認識も、つくるものの考え方も大きく変わっていきました。国宝の美しい仏像に出会いながら「たぶん千年後も日本人はこういうのを美しいと思うのだろう」と思いを巡らし、「千年後も吉野の桜は咲き誇り、人はその美しさを愛でに訪れるに違いない」と確信しました。

今と昔で大きく変わるのは技術や社会の仕組みであって社会そのものは基本的にはあまり変わりません。技術的なことは進歩しても、人の心や営みはいつの時代でも同じなんです。万博では変わらないものと変わるものをうまくつなぎながら未来のビジョンを見せていきたいと考えました。

そして誕生したのがこれまでの延長線上とはまったく異なる切り口で取り組んだ9種類のロボットのデザインです。デザインテーマは「日本的なる、もののあわれ」。今後いかなる未来が来ようと、日本という歴史と風土から生まれるロボットの姿には、やはり古代からの延長としての情緒や風情が、自然とにじみ出た文化としての形があるはずです。しかもおそらく誰もがAIを使って好きな外観をつくることのできる未来がくるでしょう。その自由さも含めて表現に落とし込みました。



左) 平等院奉納作品 鳳凰の卵 ©一般社団法人奉納プロジェクト 撮影 藤塚光政
右) Punica ©FUTURE OF LIFE / EXPO2025



クリエイティブは物語性と美意識のうえに

僕はものをつくるときはかならず対象の背景となる物語の設定から始めます。僕のクリエイティブはほとんどそこにあると言ってもいいでしょう。

「ものをつくる時は、まずは言葉で表現しなければならない」。このことの大切さを僕はフランスの大学院で切実に感じさせられました。そのために、まず、子どもにもわかる言葉で揺るがないコンセプトを構築します。ロボットデザインなら、ロボットの身体自身が言語となって伝えるようなデザイン、アートなら世界中の誰が見てもイメージや物語が頭に浮かぶテーマを。

今、僕はデザイナーとアーティストも、科学と芸術も、デザインと技術も、本質的な意味においては同じものだと思っています。そして、そのすべてにおいて「美しさ」という感覚が必要ではないかと考えています。人それぞれになにかしらの美意識は存在しています。しかし社会の必然として美のあり方を個々に意識する事が大切ではないでしょうか。美学や美意識をもっと気持ちの良いものとして多くの人に受け入れられるようになっていけるのか、そんな思いを抱きつつ、日々クリエイティブに携わっています。



松井龍哉 (まついたつや)

フラワー・ロボティクス株式会社 CEO

日本大学芸術学部 客員教授、成安造形大学 客員教授、日本建築美術工芸協会 AACA賞選考委員

受賞: グッドデザイン賞、ACCブロンズ賞、iFデザイン賞(ドイツ)、red dotデザイン賞(ドイツ)

著書: 『優しいロボット』大和書房 2021年

AACA賞の今、これから

古谷誠章 第34回AACA賞選考委員長

東條隆郎 aaca会長、第34回AACA賞選考委員



東條:AACA賞は協会の理念・目的にか
なった環境・景観を対象にしていますが、
その選考基準は時代とともに少しずつ
変わっています。今回は、選考委員長の
古谷誠章さんと共に、近年のAACA賞
関連作品の解釈を通して、AACA賞のこ
の先を展望してみようと思います。

岐路に立つAACA賞

古谷:AACA賞2024はある意味、王道
の作品が選ばれたと思います(ポーラ青
山ビルディング/土浦亀城邸 復原・移築)。
近代建築では建築とアートの分離が普
通になってしまいましたが、かつては建築
とアートは不可分な関係にありました。そ
ういった本来的な意味で、ポーラ青山ビ
ルディングはオーソドックスな作品だと思
います。土浦亀城邸の移築復原という
文化的に大きな試みの二つを合わせ、ま
ぎれもなくAACA賞にふさわしいという
ことになりました。

かつての建築は、計画段階からアート
が組み込まれることを想定してつくるも
のでした。西洋では、ファサードのどこに
どのような彫刻を何体置くかが設計の大
きな要素となっていて、建築家にはアートの
配置の構成力まで委ねられていまし
た。日本の襖絵や欄間の彫刻なども、建
築の中に組み込まれたアートとして不可
分な状態にあると言えます。建築と美術、
工芸は一体化していたという大きな歴史
がある中で、近代に入ってそれが分離し
始めて、アートと建築は自由な関係になっ
て、アート自体は交換されるような形にま
で分離してしまいました。

このような時代の流れの中で、AACA
賞もまた、何を指すかを再考するタイミ
ングになっていると思います。その点にお
いて、今回の応募作品群の中には、次なる
AACA賞に繋がるのではないかと
思われる試みがいくつか入っていたように
思いました。

工業技術ではない工芸的な技

東條:鎌倉アパートメント(AACA賞2024
入選)は、住宅メーカーの既成の住宅ユ
ニットの配列を少し工夫した上で、銅の
メッシュのカバーをかけたような作品です。
銅は徐々に赤茶色、緑青色へと変化し
ていきますが、鎌倉らしいファサードを考
えた時に、周辺の銅板葺の屋根の古い
家が多いことや鎌倉大仏が緑青色であ
ることから銅の使用を選択したそうです。
古谷:大きな銅細工のようなものを作っ
ているという意味で、非常に工芸的だす
ね。カバーとなっている開閉する障子の
取り付けなどの納め方はまさに職人の技
術で、金物なども含めて非常に工芸的
手法でできている。モダニズム建築の中
に絵を掛ける状態のちょうど逆。モダニ
ズムの、工業製品の建物は中にあっ
て、それを工芸的なカバーで包んでいる。
中の住宅ユニットとカバーとが好対照に
なっているところが面白いと思います。

加えると、この外装は工芸的には明ら
かにしっかりとつくられています、アート
作品としてのカバーをつくるなど、もう少
し美術を標榜させる可能性も十分あり
得ます。この点でも大きな可能性を一
つ示していると思います。



鎌倉アパートメント 写真:新建築社

古谷:花重リノベーション(AACA賞2024
優秀賞)は、江戸時代から次々に増築さ
れてきた老舗の花屋を改修しています。
奥の住居を壊し、無垢の鋼材を使って

過去の記憶を残しつつ、生き生きとした
空間を生み出しています。さりげなく緻密
に計算されたディテールが使われていて、
日本的な雰囲気も醸し出しています。

鋼材は既存の木の柱よりも細い60ミリ
角で、全溶接で作っているところは職人
技術的です。接合部は削り出しでつくら
れており工業製品化は不可能。建築学
会賞などは時代を引っ張っていく社会
的な役割のようなものがあり、どこかで汎
用性も意識されていますが、たとえ汎用
性と距離を置いても工芸的指標や美術
を標榜するような要素が入っている試み
はAACA賞がピタッとくると思います。



花重リノベーション 写真:開拓弥

東條:巨大な三角形のCLT(直交集成材)
製の木架構で大空間を生み出した
ROOFLAG(AACA賞2024 優秀賞)
は、AACA賞を決める際にポーラ青山ビ
ルディングと意見が二分し議論が展開さ
れました。中に入ると、教会建築、ヨーロ
ッパの大聖堂で味わう気持ちの高ぶりの
ようなものを感じさせる空間です。物の
存在としては重いですが、光の取り入れ
方やそのディテールなど含めていいもの
があると思います。

古谷:巨大な木架構で一気にダイナミ
クな空間を作り上げた建築家の構想は
素晴らしいと思います。職人が扱う昔の
材木と違い工業的に作られたCLTを使

い、すっきり見せるために技術者の執念のこもった金具が開発されています。工業技術の粋を集められています。私は、先の二つにある職人的、工芸的なアプローチとは違うと思いました。工業的、工業技術的なものを工芸として評価するか、という点で意見が分かれたと思います。



ROOFLAG 写真:藤塚光政

新しい価値を生み出す

古谷:ジンズホールディングス東京本社(AACA賞2024 美術工芸賞)は解体予定のビルをリノベーションしながら本社オフィスにしました。リノベーション手法はそれほど独創的なものではないですが、オフィスにアートを飾るのではなく「働けるギャラリー」にしたところにある種の新しさの可能性を感じました。ギャラリーのような空間をつくり、長谷川祐子さんのキュレーションのもと展示作品も入れ替わっていき、まさにギャラリーです。似た手法では、藤本壮介さんが手掛けた老舗旅館をリノベーションした白井屋ホテルがあり、アーティスト参加度ははるかに上回っていますが、宿泊施設に美術が施されるのはよくあります。今回はオフィスで試みたことで一段階違う意義があったと思います。



ジンズホールディングス東京本社 ©Keizo Kioku



白井屋ホテル 建物内に張り巡らされたレアンドロ・エルリッヒさんの《Lighting Pipes》。タペストリーは安東陽子さんの作品 ©Katsumasa Tanaka

土木構造物の可能性

東條:虎ノ門ヒルズステーションタワー(AACA賞2024 特別賞)は、虎ノ門ヒルズという街の中の一つのビルですが、周辺とつなぐ共用空間の作り方が素晴らしいと思いました。隣の建物との間は、交通量の多い国道1号(桜田通り)の上を巨大な歩行者デッキ(T-デッキ)で繋いでいるのですが、単に繋ぐだけではなく、そこに生きている空間・環境を創出させている。橋という土木構造物の重々しさを感じさせないですね。

橋でAACA賞を受賞したものには出島表門橋(AACA賞2018)があります。当時は土木構造物は賞の対象外となんとか考えられていたのですが、非常に美しい上、それを実現する仕組み、維持していく仕組みも素晴らしいと評価されました。

古谷:両方とも構造家の渡邊竜一さんの作品ですね。土木構造物の通り相場を覆す美しさがあります。出島の橋は造船場でつくられたんですね。建築と美

術の融合という範疇には入りませんが、橋が本来持つべき性能や質に対して美しく工芸的な回答を出せています。橋梁技術と工芸的な手法が融合しているとも言えるかもしれません。



虎ノ門ヒルズステーションタワー



出島表門橋 ©momoko japan

ランドスケープデザインの可能性

東條:aacaの会員にaacaが目指す空間を最も具現化している空間は?と聞くと、モエレ沼公園(AACA賞1998)を挙げる人が多いですが、古谷先生ならば何を挙げますか?

古谷:モエレ沼公園は極めて特殊で、簡単に真似できるものではないです。丸亀市猪熊弦一郎現代美術館がそれに匹敵すると私は思っています。建物正面の壁画は、建築家の谷口吉生さんが猪熊さんの習作の一部をホワイトで消してこれを使いたいと提案したものです。それを単なるグラフィックとして再現するのではなく、石職人が白い大理石に黒い石を象嵌していて、極めて工芸的につくられました。しかも駅前広場や美術館の外構はランドスケープ・アーキテクトのピー

ター・ウォーカーが担当し、美術館が孤立しないように計画されています。それぞれが役割を果たしている。共に奏でていると思います。

東條:AACA《大賞》と言えそうな内容ですね。



モエレ沼公園 写真提供:モエレ沼公園



丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 撮影:増田好郎



丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 撮影:増田好郎

東條:ランドスケープには可能性がまだ無限大にあるような気がします。三谷徹さんが手掛けた品川セントラルガーデンは周辺にすごいボリュームの建物が並ぶ中、圧倒的な緑の空間をしつらえています。ディテールもよく考えられていて、中に入ると自分の空間を持つことができます。

3rd MINAMI AOYAMA (AACA 賞2024 入選)も小さいけれど、非常に気持ちのいい空間でした。

古谷:モニュメントのようなものには予算がつき難いですが、ランドスケープは大な

り少なり何かしなければならない部分ですからね。まだ十分開発されていない領域のような気がします。



品川セントラルガーデン



3rd MINAMI AOYAMA ポケットパーク全景
写真:西川公朗

aaca創設の時代、今、そして今後

東條:バブル期の前後には、公開空地に大きな彫刻、モニュメントが設置されました。例えば大手町界限では、ビル前の広場に、アレクサンダー・リーバーマン、清水九兵衛、川上喜三郎などが並んでいます。巨大な彫刻があることで空間のダイナミズムのようなものが出てくるので、私は決して否定しません。それこそaaca的なのですが、昨今では予算が取れず難しい、というのが現実的な問題としてありますね。過去には彫刻作品がAACA賞をとったこともありましたが最近ないのは、やはり時代性もあるかもしれません。

古谷:芦原義信先生がaacaを創設した1988年はまさにバブル期でした。しかも芦原先生は日本芸術院の会員だったので、芸術院で彫刻家、洋画家などさまざまな先生と親交されていて、実際に芦原先生の公共建築物でモニュメントを芸

術院の他の先生に頼むようなこともありました。アーティストと建築家の蜜月時代でした。

バブル期には戻りようもないですから、同じことを目指すのは難しい。最初に申し上げたように、私たちは、次なるaaca的なもの、AACA賞に該当するもののイメージを探る必要があります。今まで挙げてきた多くの作品には、バブル期以降、行き詰まっている建築と美術の状況を打破する道筋のようなものがあると思います。審査員側にも、次なるaaca的なものの兆しを見たいという願望がありますね。

どのように協働していくべきか

東條:AACA賞からは少し話がそれますが、aacaでは建築家や美術家、工芸家などがどう協働していくかも考える必要があります。最初に建築家に仕事の依頼が来てコンセプトをつくり始めますが、その段階から協働するのが理想ですね。

古谷:建築家に目が行きがちですが、建築家は、様々なコラボレーションの中で指揮棒を振りまとめるコンダクター的な役割を担っています。建築と美術、公共空間と美術、土木構造物と美術、それらが融合していくことに未来をもとめるのなら、構想段階から、美術家、工芸家などそれぞれが持ち合わせている技法やフィロソフィーをもって一緒に考えていくことが必要です。それによって、全く新しいもの、全く新しい文化的空間が生まれる可能性があると思います。

*AACA賞2024 受賞作品の詳細は、協会の公式ホームページでご覧いただけます。
<http://www.aacajp.com/award/2024/index.html>



特集: AACA賞 [第34回AACA賞] クライアントの立場から アートは感受性のスイッチ

横手喜一 ポーラ・オルビスホールディングス 代表取締役社長



文化的空間を創造する上において、事業者の思想や考え方は重要です。AACA賞2024受賞作の事業者の親会社であるポーラ・オルビスホールディングスの横手社長に、文化に対する姿勢について伺いました。

ポーラの沿革と文化性

ポーラの創業は1929(昭和4)年です。この年はエレベーターガールが生まれた年であることからわかるように、社会が大きく変わり、都心では若い女性がおしゃれして仕事をするといったことが急速に生まれていった時代でした。

1932(昭和7)年に策定した企業理念の中に掲げた企業目的には「理知に輝く健康美と、澁潤たる精神を創ることによって、女性文化のより高き躍進に貢献することを使命とする」と書かれています。この時すでに企業経営の中に「文化」というものの見方を入れています。人の生活のあり方や生き方、豊かさ、つまり文化度を上げることを応援していきたいという想いは、今なお、私たちのグループに受け継がれ続けています。

感受性のスイッチを全開にする

現在の社会は複雑で多様な価値感が共存するようになりました。そのような中、現在のポーラ・オルビスグループでは、このようなミッションを掲げています。

「感受性のスイッチを全開にする」

湧き上がる好奇心。心に響く新たな出会いや発見。

昨日とは違う世界の広がり。冴えわたる感受性は、
人生を変える。もっと楽しく、もっと心豊かに。

このミッションには、感受性を通して、社員だけではなく、お客さまや世界中の人々が心豊かで彩りある人生を過ごす、という願いが込められています。

感受性は辞書的には、外部の刺激や印象を受け入れる能力や物を感じとる能力のことです。社会のありようが著しく変化する今の時代の中では、この、何かを感じ取る能力が新たなものを生み出すと私たちは考えています。答えを求めても求めきれないようなことに対し、想像したり、問いかけたりする行為の中に、自分らしさや、自分と社会の関係性のようなものが見出されてくる。そしてそれが、新たな文化を生み出していくのです。

訪問販売員の第一号は、物売りは男性の仕事と当たり前にも思われていた時代に生まれました。セールスマン募集の張り紙を見た若い女性が、「女やったら、あきませんか」と飛び込みで志願されたことがきっかけでした。なぜ男性しかやれないのか、なぜ女性はダメなのかという社会に対する問いが、社会に進出する女性文化を生み出すきっかけの一端を担った

のは、分かりやすい例かもしれません。

感性を刺激する仕掛け

ポーラ美術館では、対話型の作品鑑賞を通じて感性を刺激する、体験的な学びの場「アート・ワークショップ」を実施しています。アートに対峙する時、作家名、タイトル、作家の時代や流派などや、何をどのような技法で描いているかなどの解説がセットでないと楽しめない、と思い込んでいる人が多数存在します。しかしアートには答えがあるわけではなく、一人一人の見方や解釈があるのが当たり前。先入観なく自身の想像を巡らし、自分の見方を言語化しようというワークショップです。

多様性や人のものの見方を知り、発見し、相対化することを学ぶ中で、「以前はアートに苦手意識があったが、自分で想像を巡らす鑑賞が楽しくて、美術館に行くのが趣味になった」という人もいます。アートに接することで、自分の思考や考え方が広がったり、これまで気づけなかったことに気づいたり、言語化することで自己認識が少しすっきりしたり、そういうことに繋がっていくようです。アートは感受性の大きなスイッチと言えます。

ポーラ青山ビルディングの場合

ポーラ青山ビルディングはグループ会社のテナントビルですから、仕掛けを組み込み、ここに働く、集うことでさまざまな価値観にスイッチを入れることができればと考えました。アートがあることは、きっかけ作りとして非常に大きな材料になると思います。アートの他にも、化粧文化に関する調査・研究や公開普及などを行うポーラ文化研究所や、移築した土浦邸もあります。問いを引き出すきっかけがいっぱいあることで、新しい気づきが生まれると思います。

土浦邸を移築したのは、土浦邸の竣工が1935年でポーラの創業と時代背景が同じであることも一因です。完成度の高い1930年代のモダニズム建築ですが、フランク・ロイド・ライトのもとで修行した土浦亀城氏の生活提案は、時代の大きな変化を捉えていますし、共同設計と言われている妻の信子さんは「日本初の女性建築家」とも言われた方でした。女性の社会進出と生活様式の変化は表裏一体だと思いますし、創業の時代を、建築文化も含めてきちんと今に伝えてくれるところが、ここにあることの意味だと考えています。

ポーラ・オルビスグループは、「美」の価値を社会に提案する企業グループとして、内面の美しさを支える文化・芸術を支援し、豊かで平和な社会と文化の発展にこれからも貢献してまいります。

特集：AACA賞 [第34回AACA賞] 建築家の立場から 建築とアートが溶け合う関係をつくる仕組み

安田幸一 安田アトリエ



プロジェクト概要

ポーラ青山ビルディングは、北側に神宮外苑と赤坂御用地、南側に外苑墓地の豊かなグリーンなどの良好な環境に囲まれた青山通りに面して建つ賃貸オフィスビルである。プロジェクトの始まった2018年頃、都心では大規模開発プロジェクトが次々と竣工し、開発の要である大型オフィスの大量供給時代にある中、2019年末から新型コロナウイルス感染症に対する対策も考える必要があった。企業の多くは在宅勤務制度を採用し、オンライン会議も日常化し、働き方も大きく変化した。この動きに伴いコロナ禍以降もオフィスに対する考え方や空間に対する要求も以前と異なってきた。

オフィス空間には「個人が集中する場」と「コミュニケーションを図る場」の確保と個人がワークの種別によって好みのスペースを自由に選択でき、日常のオフィス環境が日々刺激的に感じられるような「感性に訴える」空間づくりが求められる時代に突入していると考えた。プロジェクトのスタートから、この空間づくりのキーと成りうる考え方が施主から出された。ビル全体に対してアートを積極的に取り入れたいということであった。建築の設計体制（安田アトリエ+久米設計）が決まると同時にアート・ディレクターの村井久美氏がアートと建築をつなげる役割を担うことになった。

ビルのファサードと地上広場にシムラプロスの立体アート、14Fのカフェにつながる屋上テラスに大山エリンコイサム氏の壁画、1Fの緑地に板東優氏の彫刻作品というアーティストの顔ぶれと設置箇所が徐々に決まっていっていった。地下には250人収容できるホールが計画され、さらにプロジェクトの基本設計段階で、敷地内へ文化財「土浦亀城邸」の移築という提案に対し東京都の許可が下り、南側公開空地の一角に建設されることが決定した。賃貸オフィスではあるが、アート、文化財、ホールという盛り沢山のプログラムへ進化していった。本稿ではアートの中でも特にシムラプロスの立体アートと建築の協働作業について述べる。

空間にアートは街の中/建物でどのような存在と捉えたか
施主が所属するポーラ・オルビスグループにおいて、「建築とアートの緊密な関係」を築いてきた歴史と経験（ポーラ五反田ビル、ポーラ美術館、ポーラ銀座ビル等）を踏まえて、企業ビジョンである「多様化する『美』の価値観に応える個性的な事業の集合体」に応え、「アート×感性体験が可能になる場」を様々なカタチで提供することを念頭に置き価値向上をめざした。

渋谷方面から、特に人通りの多い神宮外苑の銀杏並木と青山通りの交差点からの都市景観において、同じ建物高さの隣のTK青山ビルと今回のポーラ青山ビルディングは、青山



ポーラ青山ビルディング外観 撮影：楠瀬友将



土浦亀城邸外観 撮影：楠瀬友将

一丁目交差点までの街並みが今後発展していく中で先導する役割を果たしてくると予想された。2棟つながった大きな透明なガラス面の中に立体アートが飾られる姿を想定した。借景ならぬ「借ファサード」ともいうべき周辺環境を読み取った結果、青山通りという長大な公共空間の中で、アートが通りの人々に必ずや潤いを与えてくれると確信していた。このことが青山という「街への貢献」となることを期待した。

1Fの緑地帯に置かれたブロンズ像は、住宅地へ向かう近隣住民の皆さんや3Fの保育園の親子、南側敷地の土浦邸を訪れる人への心の潤いになる。14Fの壁画は、限定されたビル内のテナントの方々しか入れない特別感を味わってもらうことになった。3箇所のアートは、一般の人が遠方から鑑賞するもの、すぐ近くから鑑賞するもの、そしてテナントの人が直近で鑑賞するという3種類の鑑賞の仕方が異なる。人がアートに触れる方法にも工夫がなされた。

アートを現実化するために、建築家はどのような試行錯誤を行うのか

基本計画では、シムラブロスは迷いながら形を模索していた。まずはシダ系古代植物「シギリリア」という抽象的な概念だけが提示された。大きさや形状、材質も未定のまま、アーティストはスケッチやモデルスタディを繰り返した。床面積を確定するためにも建築の設計を進めるため、我々建築設計者はまだ見ぬアートの形に頼らない「場」を提供することにした。つまり、青山通りに面するファサードを5層分凹めた「街の床間」を提案し、そこにまだ見ぬ立体アートを設置することとした。日本の床間は、軸物、花などフレキシブルにアートを飾り、来客をもてなしてきた。ここでもアートの大きさ形状が決定されないまでも、それを受け入れる「場」を用意する必要があった。基本設計に入り、アーティストも建築が用意した床間を意識し始め、アート・ディレクターの助言と協力も得て、アートの方向性がある程度固まってきた。球体や花びらのような床間空間に浮遊するスケッチが現れたため、アーティストに荷重条件を早めに提示してもらい、建築は立体を中空に支持するための四角錐構造体を用意することとした。人形浄瑠璃で言えばアートは主役の人形であり、建築は主役を支える黒衣である。施主、アーティスト、アート・ディレクター、建築設計者、アート製作者に、時折、構造、設備、照明設計者が参加する会議が2週間に一度のペースで実施された。この会議は、各立場からのアイデア出しの場となり、建築とアートが溶け合うためには不可欠な「作戦会議」となった。

立体的に飛び出した四角錐の構造体は、立体アートを支持すると同時に、都市風景を偏光ガラス越しに見渡すことが

できる「アート鑑賞スペース」を内包することとなった。1階ロビー、公開空地の豊かなグリーンの中にもアートを置き、立体アートの直下にアーティストとランドスケープ・アーキテクトが協働デザインしたベンチも置かれた。アートの仕上げや立体アートの支持方法も実施設計段階で詳細に検討され、構造は支持パイプが水平に突き出すこととし、よりアートを浮遊させる案へと変更されていった。アートの荷重条件と支持方法を変えたため、構造計算が繰り返し行われた。アート鑑賞スペースの形状も再検討され、床の石張りのディテールなど内部の仕上げも幾度となく変更された。絶え間ないアーティスト、アート・ディレクター、建築設計者のアイデアスケッチのキャッチボールの末に最終案が決定し制作に取り掛かった。

建築とアートは、多くの場合、建築の計画がある程度決まった後にアートやアーティストが選定され、制約の中、関係付けられてきた。それを否定するわけではないが、今回は、建築もアートもかたちが定まっていなかった早期の段階から議論しながら創り上げてきた。よりアートとの距離を縮めることが可能になった大きな要因であると考えている。

時間とともに変化する光の中でアートも刻々と変化し、日常的に非日常の特別な感覚を味わうことのできる建築とアートの融合した姿が2024年春にペールを脱いだ。初めてアートの覆いが外れたとき、5階の廊下から見てみると、街ゆく人々が皆こちらを見ているのが印象的であった。

「ボーラ青山ビルディング 土浦亀城邸 復原・移築」関係者

所在地:東京都港区

建築主:株式会社ビーオーリアルエステート

◎ボーラ青山ビルディング

デザイン総括:安田幸一

建築設計:安田アトリエ+久米設計

構造設計:金箱構造設計事務所(基本設計)久米設計

設備設計:久米設計

照明計画:キルトプランニングオフィス

ランドスケープ設計:ランドスケープ・プラス

監理:久米設計+安田アトリエ

アート・ディレクション:TAKプロバティ

アーティスト:シムラブロス、大山エンリコイサム、板東優

アート製作:三和タジマ

アート構造設計:フラット

保育園インテリア:ALTEMY

施工:鹿島建設

◎土浦亀城邸 復原・移築

原設計:土浦亀城・土浦信子

復原・移築設計:安田アトリエ

監理:安田アトリエ

歴史考証:東京工業大学山崎鯛介研究室、居住技術研究所、

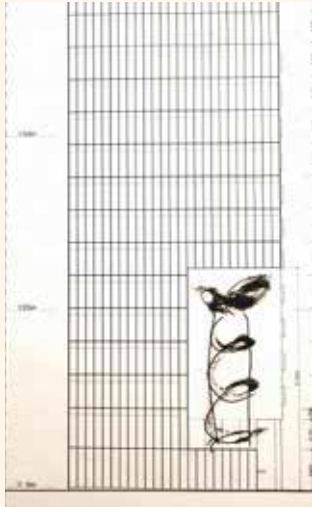
東京工業大学安田幸一研究室

構造設計:金箱構造設計事務所

設備設計:ZO設計室

ランドスケープ設計:ランドスケープ・プラス

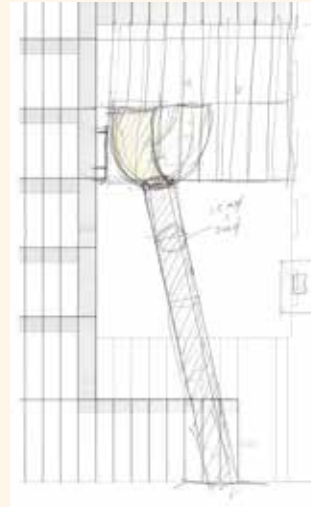
施工:鹿島建設



2019.11 アーティスト スケッチ



2019.12 アーティスト スケッチ



2019.12 建築家からの提案スケッチ



シガラリア化石



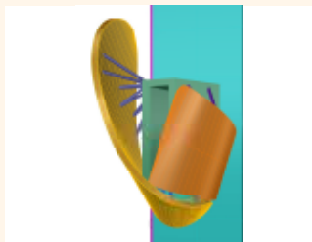
2020.1 2020.4
アーティスト プランの変遷 (2020-2021)



2020.5 2021.5



2022.6 建築家スケッチ



2020.7 支持方法検討



製作打合せ (2021-2022)



2023.10 作品検査



2023.11 作品検査



2023.11 現場施工



特集:AACA賞 [第34回AACA賞] アート・ディレクターの立場から ポーラ青山ビルディング アート・プロジェクト

村井久美 TAKプロパティ



本アート・プロジェクトは設計と同時進行するかたちで展開し、一貫してVUCA^{*1}を肯定する道りであった。姉弟ユニット・シムラブロス、大山エンリコイサム氏、板東優氏の既存作品活用を含め大きく3つのゾーンを対象としている。国道246号(青山通り)に面するファサードに作品を担うシムラブロスは『シギラリア^{*2}』という主題のもと、計画フェーズの進行とともに造形を昇華させ、最終的に4つのシーンに作品を結実させている。現代に3億年前の生態を重ねるプロセスに予定調和は無い。作家のスケッチや模型から可能性の片鱗を探り、構造や製作検討を重ね、最適な特殊素材(金属・ガラス)の見極めに至るまで、各分野のプロフェッショナルが積極的に関わった到達点である。14F屋上テラスの作品制作に臨んだ大山エンリコイサム氏は、都市上空のパースペクティブをランドスケープ・デザイナーと協議し、ポーラ美術館学芸員と耐候性塗料の検証を重ね、春浅き空の下、26mの長大な壁面に新たな技法をもって約1ヶ月の現地制作を敢行した。板東優氏の彫刻群をパッサージュに息づかせた緑地は、コレクションの一端を地域に共有するかたちで憩いを提供している。

トータル6年に及んだプロジェクトは、東京に新たなアートの風景とアーツ&クラフツの次なる地平を予見させるものとなった。

シムラブロスのアートワークは制作経緯を含め、本プロジェクトを象徴するものであった。以下はその要約である。

作家選定と体制について

建築にアートワークを検討する際、設計者から建物の説明を受けることからスタートするのが一般的であり、同時に施主のニーズをヒアリングすることも重要な要素となる。空間を理解する過程で様々な作品の可能性は想定されるが、予定調和より化学反応のような、空間と作品の相乗効果が期待される関係を私は大切にしている。コーディネートに終始するのではなくディレクションとして取り組む仕事は、新たな表現や未知なる領域を共に探る作家を選定することに重きを置く。プロジェクト規模によって複数のアーティストを選定しコンペ形式で作家決定に至ることも少なくない。ポーラ青山ビルディングは稀有な事例であり、芸術文化活動に長く取り組んできた企業側がアーティストを指名して計画がスタートした。大規模プロジェクトの経験が浅かったシムラブロスにとって、都市景観に対する社会的責任や、自身の作品の在るべき姿を問うことは試行錯誤の連続であり、現実とのはざまに課題は山積した。そのような折、揺らぐ彼らに対し芸術性、製作手法、マテリアル、時にコミュニケーションのフォローについてはアート・ディレクターの立場から私が役を担い、設計者や製作技術者は実現可能

な技法や予算、工期を見守り助言した。

建築・アートを取り巻く専門家による協働

ポーラ青山ビルディングでは、既存建物の解体前、建築計画の極めて初期から作家がアートワークのプランニングに着手している。設計の変化にアートが対応し、作品をより良くするために度々設計変更も加えられた。本プロジェクトのアート作品と建築が「密実な関係」に感じられるのは、そのようなプロセスの賜物と言える。設計者である安田幸一氏をはじめ、設計監理の立場から久米設計の方々、また製作側では多様なマテリアルに経験豊かな専門家が集まり、プロジェクトチームを編成。現代アートに理解ある施主のもと、多くの関係者が連携して難題を乗り越え、長きにわたるすべての過程が作品に結集している。

企業・都市との関係性

シムラブロスは、初期の会議の席でシギラリアの表皮の化石を披露した。造形以前に化石について想いを語り、石炭として現代社会を支えるその化石の特性と、都市生活との接点を何らか探ろうとしていた。シギラリアは別名、封印木とも呼ばれる。人肌の細胞と同じ六角形をしているシギラリアの表皮に、化粧品企業との確固たる関係性を導いたと言いが、見えない縁(えにし)はある種の原動力を呼び起こす。それは6年間のプロジェクトの根底に終始一貫し、通奏低音のように皆が感じ取っていたと思われ、これからの都市にとって大切なものを予感させた。

6年という月日を振り返る時、限られた字数に収まりきらない数多の物語がある。しかし古代植物が物語る時空に比すれば我々の営みはいかばかりであろうか。この先、数億年経った未来の人間がこの片鱗を垣間見ることがあれば興味深い。アートは、人と見えない何かをつないで居る。

^{*1} VUCA: Volatility「変動性」 Uncertainty「不確実性」 Complexity「複雑性」 Ambiguity「曖昧性」

^{*2} シギラリア: 約3億年前の石炭紀に繁茂したシダ科の植物



a



b



c



d



e



f

シムラブロス《悠久の光景》(©SHIMURABros)は4点の作品で構成されている。

《シギラリア》5Fアート鑑賞スペースはの葉の形状に包まれ、光学ガラスを通して街を眺めるための空間。(a, b, d, f)

《つぼみ》上部オブジェ穴から落ちた胞子は、光学ガラスが嵌め込まれた地上オブジェへ連動。(c)

《待合のリゾーム》地上では《シギラリア》の根幹を石のベンチとして表現。(c) 《系統樹》5Fガラス面コンセプト・イメージ(e)



大山エンリコイサム《FFIGURATI #630》(Artwork ©Enrico Isamu Oyama / EIOS)

14Fに四季折々の花とすすきが群生する安らぎのテラスがある。

テナント利用者に開かれたラウンジから延伸するように広がり、室外機を覆う壁面が作品支持体となった。

全身運動から生まれる美しい手の動きの延長にみずみずしい作品を表出させた。



板東優

高低差のある緑地を活かしブロンズ像2体が設置された。



ファイバーアート誕生の背景

繊維素材を用いた造形作品が「ファイバーアート」と称されているが、その活動が生まれた背景を辿る。中世のヨーロッパでは教会や城館の壁にタペストリーが掛けられていた。タペストリーは一般に綴織で織られたものをいう。経糸に丈夫な麻または木綿を用い、緯糸に色毛糸を用いて絵画的な模様が自由に、また大柄に表現されている。最初は宗教的図像を題材として教会などの祭壇、柱間などに用いられたが次第にその主題も宗教的なものから世俗的なもの—騎士道物語、戦争絵巻、寓話—などが多くなり、王侯貴族や富裕階級の邸宅内でも用いられるようになった。大型のタペストリーは審美的な室内装飾品であるばかりではなく石の建築物においては石の冷たい壁を覆い、室内の寒さ、暑さ、湿気を防ぐとともに部屋のパーティションとしても用いられた。また野戦や狩猟の時、旅行や移動の折には、天幕の中を飾ったりしたが、折り畳んだり巻き運ぶことができる便利なポータブルな壁画であり、保温器具、カーテンでもあった。

タペストリーは何世紀もの間、画家の描いた下絵をもとに織られていたが、織り手自らが個々に構築する動きがでてくる。19世紀後半から20世紀初頭にかけて産業革命による工芸品の品質低下を危惧したイギリスのウィリアム・モリスを中心に繰り広げられた中世の手工芸に立ち返ろうとするアーツ・アンド・クラフツ運動があった。モリス商会ではテキスタイル部門を強化し、家庭向けの室内装飾品の製品制作にも力を注いだ。



タペストリー《貴婦人と一角獣》クリュニー美術館所蔵

バウハウス

1919年、ドイツのワイマールに工芸・写真・デザインなどを含む美術と建築に関する総合的な教育を行った学校、バウハウスが設立された。バウハウスに関して建築とデザインについてはよく知られているが、バウハウスの開校から閉鎖まで存在して

いた織工房のことは日本ではあまり紹介されていない。織工房では経糸を見せずに緯糸で絵を描くように織る伝統的なタペストリーからの離脱を求め、当時ベルリン民族学博物館で度々開催されていたアンデスの染織品を手本に経糸と緯糸が同等に見える織物に向かっていった。直接的な伝達手段とデザインは、「よいデザインとは素材固有の本質を理解し、それに従うことからくる」というバウハウスの理念と十分に共鳴した。バウハウスで指導にあたっていたパウル・クレーもまた、「プリミティブ・アートは手作りの工程からできたものであり、本能的に創造され、根源的な表現である」として織物の模様と構造を高く評価し研究していた。そのクレーから造形理論を学んだ学生は、簡単な織機から複雑な技法で織られたアンデスの織物をさらに研究しその構造、工程、主題、実用性、そしてその可能性をより深く理解し、実用的な織物とアートの織物へと展開させて織物と建築空間との関わりを深めた。

織工房の学生の中にアンニ・アルバースがいた。アルバースは「プリミティブ」な資料からモチーフを取るのではなく、織構造から直接に発生するような非具象的なユニバーサルな言語を発展させることに関心をもっていた。バウハウスのワイマール時代は表現主義的であったが、デッサウに移ってからのアルバースは複雑な色彩と形体のパターン化と共に、多層織物のような複雑な織の構造について研究した。バウハウスの閉鎖(1933)に伴い、アンニ・アルバースは夫の色彩学者のヨゼフ・アルバースと共にアメリカに渡り、ノースカロライナ州のブラック・マウンテン・カレッジで教えることとなった。そこではバウハウスとクレーの教えを授業で実践し繊維を用いた表現がアートに仲間入りする道を開き、その後のアメリカ及び世界のファイバーアートに多大な影響を与えた。



《二》アンニ・アルバース 提供:ヨゼフ・アンド・アルバース・ファンデーション

ローザンヌ国際タペストリー・ビエンナーレ展

フランスではジャン・リュリュサらによるタペストリー復興運動が起こっていたが、それは絵画を織り出すのではなく、タペストリーのためのデザイン、技法を重視するものであった。彼は1962年にローザンヌで「国際タペストリー・ビエンナーレ」を開催した。タペストリーでは律しきれない作品群が目すべき新

傾向となり同ビエンナーレを舞台にまたたく間に世界的な傾向となり、ソフトスカルプチュア、環境的な作品へと広がり、素材、技法、形態が多様化して70-80年代に最盛期を迎える。回を重ねる中で素材、技法の項は設けないと制約を解除し、素材、技法、形態が多様化してファイバーアートへと更に大きく飛躍した。これらに代表される近代の運動や活動によって、織の自立、独自の美が追求されて来た結果が近年の新しい造形へとつながる。織り、結び、編み、鉤針編み、括り、巻き、染め、フェルト等様々な技法で様々な素材を用いて普遍的なものの変換—実用性を越えて美的なものを求めて表現した。素材としては多様な糸・布・紙の他に馬毛、羽毛、金属線、合成繊維、フィルムが登場した。素材、技法から誘発される心境の表現ともいえるが、道具、素材、技法がコンセプトやステートメントの表現の手段として様々な展開を示している。



《座る人体》アバカノヴィッチ

現在の動向

ローザンヌ・ビエンナーレの公募制が始まった第6回展以降日本人作家が多く出品し一大勢力となっていく。そして日本ではファイバーアートは美術館の活動、美術教育により1990年頃には定着する。1995年の16回展で同展は終わるが、ポーランドの「ウーチ国際タペストリー・トリエンナーレ」、米国ピッツバーグの「ファイバーアート・インターナショナル」、ハンガリーの「ファイバーアート・トリエンナーレ」、スペイン語圏を中心に「国際テキスタイルアート・ビエンナーレ」が現在でも開催され、中国ではローザンヌ・ビエンナーレを引き継ぐ形で「国際繊維双年展（副題：ローザンヌから北京へ）」が開催されている。リトアニア、ウクライナに於いても開かれている。また、小品によるミニ・タペストリー展はフランスのアンジェ、イタリアのコモ、ハンガリーのゾンバテリー等で国際展が行なわれている。小品展としては日本でも100人による「テキスタイルアート・ミニアチュール」展が隔年に開催され、2025年には第9回展が行われる。2024年には京都国立近代美術館で日本を代表するファイバーアート作家、小林正和（1944-2004）の回顧展「小林正和とその時代—ファイバーアート、その向こうへ」展が開催され、「ファイバーアートの

過去・現在・未来」について考える機会となった。現在ではファイバーアート、ファイバーワーク、テキスタイルアート、テキスタイル造形、織造形、繊維造形等様々な呼称があるが、新しい技術や素材を取り入れた表現は継続的に行われている。これらの活動は繊維素材の特性を効果的に表現した造形として受け入れられ、生活空間、建築空間にも色々な形で収められている。その参考例として草間喆雄、原田ユリア、小林万里子の作品を紹介する。



草間喆雄 日比谷東宝ビル



原田ユリア フォーシーズンズ東京大手町39階スパ



小林万里子 スターバックスコーヒー目黒店

七福神巡り2025

開催日:2025年1月4日

会場:東京・品川周辺

情報文化研究委員会

「七福神巡り」はaaca恒例の年頭企画の一つで、場所を変えながら18年間続いています。日頃顔を合わせる機会の少ない会員も年初に集まり、参詣し、今年のご多幸を祈願し、会話を交わしながら街歩きをするユニークな催しです。今年の「東海七福神巡り」は寒風の中、8名が参加。京急線の大森海岸駅から品川駅まで、旧東海道にある長い歴史を持つ由緒ある社寺が集まった地域を巡りました。これまでに比べコース巡りの所要時間が少ないこと、旧東海道に沿って七福神が祀られているため道順が分かりやすいことが特徴でした。また周辺の街並みからはその境界の歴史や生活の匂い、人々の息づかいが伝わり、好奇心が呼び起こされました。

品川は江戸時代に定められた東海道五十三次の最初の宿場。現在も、当時の宿場の情景や旅人の賑わいの面影が偲ばれます。今回巡った先はそれぞれに興味を惹かれる点がありましたが、特に毘沙門天を祀る品川寺(ほんせんじ)では、住職の計らいで寺の梵鐘にまつわる貴

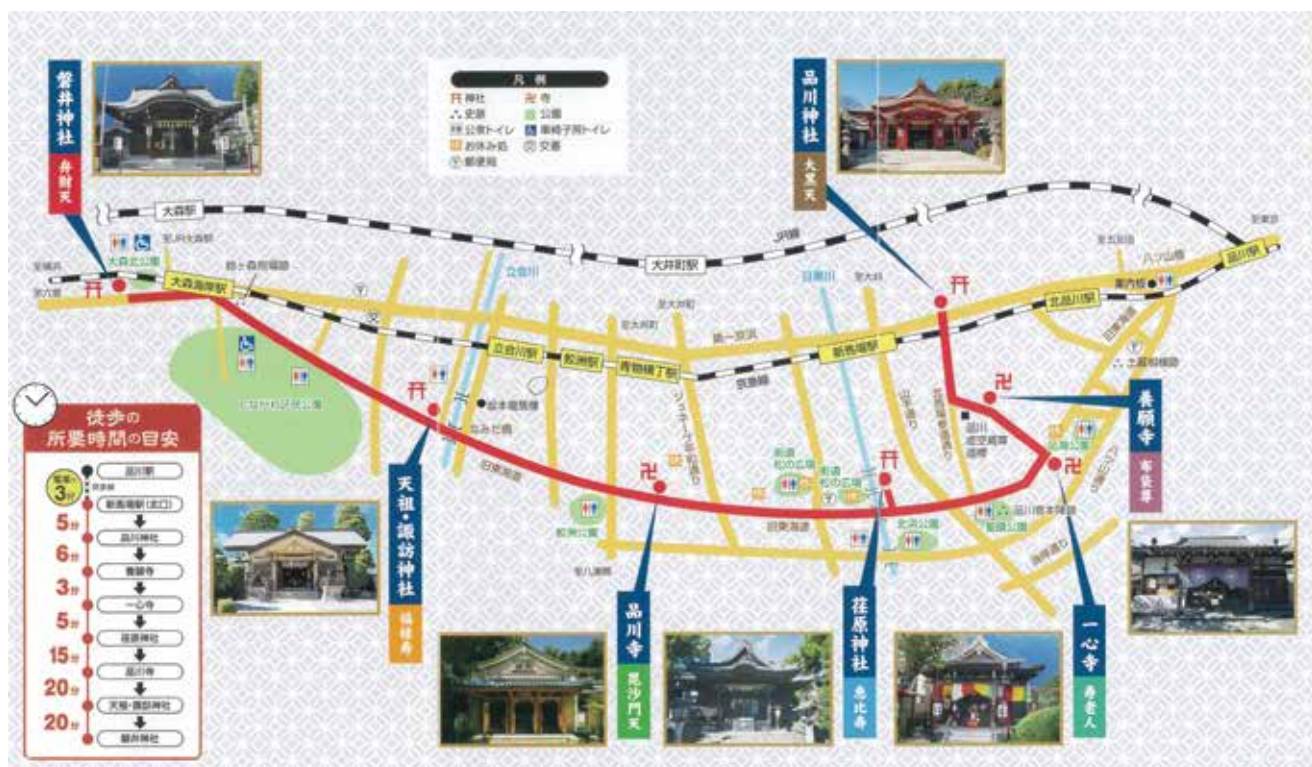
重な逸話を聞くことができ、強く印象に残りました。

この梵鐘は1657年に京都で大西五郎左衛門により铸造され、品川寺に名鐘として納められました。その後梵鐘は海外に流出し長い間所在が不明でしたが、1867年パリ万国博覧会と1873年ウィーン万国博覧会に出陳されたことと伝えられたことから、住職や関係者の尽力と熱意で梵鐘の行方を追跡。その結果、スイス・ジュネーブ市にあるアリアナ美術館で保管されていることが1919年に判明しました。返還交渉努力の結果、1930年、梵鐘は寺に贈還され、国宝に指定されました。1990年には贈還60年を記念し、返礼としてアリアナ美術館に梵鐘のレプリカが贈呈され、翌年にはジュネーブ市と品川区の友好都市の締結が実現しました。その後も両市の交流は深まり、交換留学の実施、文化の交流に発展し、品川寺の梵鐘を中心に人々に友好の輪が広がっていきました。現在、品川寺からはほど近い場所に「ジュネーブ平和通り」が設けられ、友好都市提携の記念でジュネー

ーブ市から贈られた「平和の道」と名付けられた標識が、多くの行き交う人々を見守っています。(委員 中島三枝子)



品川寺梵鐘 スケッチ:飯田比佐夫



東海七福神 おめぐり図

2025年aaca新春の集い

総務委員会

開催日:2025年2月17日

場所:田町センタービルピアタ3階(東京・港区)

aacaでは毎年2回会員交流会を開催しています。開催は2月の「新春の集い」と8月の「夏季交流会」です。新入会員と既存会員が顔を合わせ、おしゃべりしながら情報を交換し、新たな関係を構築することを目的としています。

今年の新春の集いの参加者は78名。開始前から人が集まり、グラスの底から湧き上がるビールを楽しみながら談笑が始まっていました。

東條隆郎会長の挨拶ではaacaの今後の活動などについて紹介。下半期に入会された新入会員の自己紹介、森暢郎副会長の乾杯の挨拶、各委員会の活動紹介など、盛りだくさんの会となりました。

中でも新入会員の自己紹介は、自身の作品や製品を持参のもと行われ、制限時間を大幅に超える熱いトークとなりました。改めて作品写真とコメントをいただきましたので、ここにご紹介します。

高崎真知子さん(織作家)

織を始めて50年になります。15年程前から日常生活の中での思いを百合の花をモチーフにして制作してきました。写真の作品の織り方は綴織り。使用している素材は、ウール、綿、化学繊維などです。



寺本沙香江さん(フェルト作家)

写真はジュール・ヴェルヌの『海底二万里』に思いを重ねて、人間が快適に住める未来の都市をイメージした作品《海底都市》です。羊の毛を幾層にも重ね、圧

力をかけ縮絨(しゅくじゅう)させて作ったフェルトとステンレスを用いています。



宮崎桂一さん(デジタルクリエイター)

CMY混色キューブ3部作は、衰退した銀塩カラー写真の減法混色の仕組みを抽象化したオブジェで、写真フィルムメーカーで研究開発に長年従事した思いを込めた作品です。写真は第73回モダンアート展(2023)の展示。



庄野泰子さん(音環境デザイナー)

写真は波の音に包まれる全長76mの海上のベンチ《Wave Wave Wave》(AACA賞2000受賞)。波・風・雨・湧水など、その場の環境の要素を生かしながら、音を通して環境とつながるサウンドスケープ・デザインを目指しています。



ピーエス工業株式会社 平山武久さん

日本で初めて加湿器を製造・販売した会社です。除湿型放射冷暖房PS HR-Cは建築意匠と一体的な計画が可能です。冷温水が循環することで、空間全体に快適な環境が広がります。私たちは、空調設備は躯体蓄熱や空気の動線などの建築自体の温熱性能を引き出す役割も有すると考えています。写真両サイドがPS HR-C。



タキロンマテックス株式会社

秋山隆典さん、井口和彦さん

建築の内装や屋根、建具などの資材の販売や施工を行っています。700柄以上ある塩ビ製粘着剤付不燃性シート「ベルビアン」。一番のお薦めの木目のWRシリーズは、独自の技術にてマット感を出す事でより木目の風合いを表現。オークやウォールナット柄を中心に揃え、グラデーション展開しています。



楽しい時間は米林雄一副会長の中締めでお開き。今年は例年より多い参加者があり、大いに盛り上がり、実りの多い交流の場となりました。(委員 中野恵美子)

第1回aaca建築・美術・工芸作品展

開催日:2025年1月19-26日

会場:建築会館1階ギャラリー(東京・港区)

展覧会委員会

展覧会委員会では、以前より、広く会員外からも公募を行うBOX展を開催してきましたが、この度、BOX展とは別に会員の皆様の作品発表の機会を新たに設け、会員間の交流の場を増やしていくために新しい展覧会「aaca建築・美術・工芸作品展」を開催いたしました。

この作品展は、建築・美術・工芸各分野の会員が美術・工芸作品だけではなく、建築・デザインなど幅広い作品を持ち寄ることができる新たな発表の場を目指した初めての試みでしたが、全国の会員の皆様から30点もの絵画・彫刻・工芸作品が出展され、沖縄、大阪、和歌山、京都からも出展いただきました。

初日の1月19日に開催いたしましたオープニングレセプションでのギャラリートークには地方の会員を含め23名の出展者が参加。出展者による熱心なご説明により、作品・制作手法などへの関心が高まると共に、参加された方々の相互理解が深まる場となりました。またオープニングレセプションも大いに盛り上がり二次会にも多くの方々が参加され、交流の輪が広がりました。会期中は約200名を超える方々(芳名帳記載者)にご来場いただきました。貴重なご意見などいただきましたこと感謝申し上げます。

(委員長 飯田郷介)



オープニングレセプション 東條会長あいさつ



オープニングレセプション

第1回の作品展を終えて

「第1回aaca建築・美術・工芸作品展」は初春の希望膨らむ時期に開催されました。

本作品展には、建築・美術・工芸・ランドスケープなどに携わるaacaの会員の方々の立体、平面などの多様な作品が出展されました。金属・石・染織・陶器・日本画・現代美術・日本刺繍・版画・ミクストメディア・立体造形・彫刻・うるしなど、さまざまな素材、多彩な表現手法が用いられた作品は、建築会館のギャラリー空間に美しく展示されました。

空間を顕在化させるアートの提供を通じた交流が行われたことにより、会員同士の連帯感を高め、多様な創造的感性の集合体であるaacaの魅力を未来へ発信する貴重な機会となりました。

初日に開催された「ギャラリートーク」では、出展者本人が、作品に込めた想いや創作技法・素材、今後の展望などを紹介し、活発な質疑応答も行われました。作品への理解が深まるとともに、交流の場として盛り上がりしました。

展示会場では、配布した出展者のステートメントなどを記載した「作品リスト」をご覧になりながら、時間をかけて作品を鑑賞する方が多かったのが印象的でした。

来訪された方々は、職業もバラエティに富み、関東地方在住の会員の方々だけに留まらず、関西地方など、日ごろ交流す

ることの少ない会員の方々も来場されていました。本作品展を通じて、多様な人的交流につながったのではないかと感じました。

会期中に来場された元aaca会員の日本芸術院会員・奥田小由女先生からは、展示内容に対して「会派・種別・大きさ・素材・表現方法など趣の異なる作品が展示されているながらも、空間構成の新たな可能性や面白みを感じる。一つひとつの作品のよさが引き立つ」とのお言葉を賜うことができました。aacaの魅力を多方面に発信することができたと思います。

建築・美術・工芸は人間の想像力と創造力の結晶です。未来の可能性を示す扉として、建築は空間を形づくり、美術は心揺さぶり、工芸は触れる喜びを生み、これらが交わることで文化を創造し、人々に感動を与え続けることになるのではないのでしょうか。

展覧会委員の一人として、この作品展が未来につながるaacaの新たな発信の一つとなることを心から願っています。そしてaacaが目指す文化的空間の創造のために、会員相互の交流や共創がさらに生まれるよう、次回作品展の開催に向けて推進し、また、外部との交流に力点をおいて外部発信の意味合いを強く持つBOX展の開催にむけて、さらなる尽力を重ねてまいります。

(副委員長 齋藤卯乃)

展覧会のこれからに向けて

「第1回aaca建築・美術・工芸作品展」は、「大きな作品の実在感の説得力があった」「作品各々のレベルが高い」などの評価をいただいて無事終了いたしました。そして作品展の開催を終え、展覧会として次なる一步をどの様に踏み出せば良いか、いくつかの課題が浮き彫りにされました。

展覧会というのは出口ですから、aacaが開催する展覧会では、その奥にはaacaが透けて見えなくてはならないと思います。第1回の作品展から見えてきた課題は、はたして建築・美術・工芸が一体となった活動であったか、という点ではないでしょうか。ただ、作品展にいらして下さった建築関係者の姿は少ないように感じました。一方、出展された会員の方からは、他にも展示の機会を持っていらっしゃる中で、aacaならではの交流も望まれる声も多く聞かれました。異業種間の垣根を超えて、aacaに集まって来た多種多様な人々とその活動を、どの様にすれば、相交えての意味深い交流としていけるのか、さらに考えていかなければなりません。

ギャラリートークで見事に語られた、作家おのおのの想いとそれを表現に落とし込む様々な工夫の話をお聞きし、私自身は、今後の鍵となるのは、「コンセプト」「想い」ではないかと思いました。アウトプットは業種によって様々でも、この社会、この地球、宇宙に共にある私たちは、「コンセプト」「想い」は互いに語り合えるように思います。また、視点を「作品」ではなく、創るということを中心に据えた「活動」と考えてみると、広く会員を巻き込めるのではないのでしょうか。

本作品展では、出展者皆様の力強い作品を前に、委員会一同、心新たにさせていただいた作品展となりました事、御礼申し上げます。そして、今後の作品展

の開催に向けては、皆様方から様々なご意見を伺いながら、会員の皆様や会員以外の方々にも、魅力ある、発見のある

展覧会を目指して企画内容を検討していきたいと考えております。

(副委員長 岡本直枝)



第208回aacaフォーラム：パブリックアートの今

フォーラム委員会

開催日:2025年3月21日

登壇者:German Suplex Airlines、菅隆紀さん、
山崎和子さん

ファシリテーター:萩尾昌則(委員長)

会場:PARCs Sangetsu Group Creative Hub

今回のフォーラムは、株式会社サンゲツ様の日比谷公園を一望する施設をお借りして開催しました。テーマは今日的な意味での「パブリック」と「アート」の関係性。3組4人の先鋭的なアーティストのご登壇のもと、活動紹介と鼎談が行われました。

制作集団German Suplex Airlines(以下、ジャーマン)の前田真治さんは尼崎を拠点に、地域課題の答えをアートを手段に導き出します。作品のプロダクティブや装飾的な美よりも、コミュニケーションを介して起こる自然発生的な現象を重視。制作は参加者にも委ねられ、前田さんは「アートは作家のものではない」と語ります。「誰とどう向き合うかが最も大切」との言葉からは「社会を信じている」ことが強く感じられ、その活動が周囲の未来をかたちづくる契機になっていることが、現代的な意味での「パブリックアート」の意義を示しています。

ジャーマンの風間天心さんはアーティストかつ僧侶。前田さんと共に実施した「ビッグブッダプロジェクト」で、人々が仏像に大切な想いを綴ったお札を貼る姿は「祈る」姿そのもの。祈りとアートを関連づけることにより、信仰が身近なものとして存在し得ることが認識できます。プロジェクト最終形として大仏は山口県のお寺に寄進され、祈りのシンボルかつアート作品として展示されています。それらの共存は現代的な信仰とアートのあり方を提示しており、日本の「宗教と芸術」の関係性の再考を促そうとする強い姿勢を感じました。深い対話を促す風間さんの眼差しから、想いを共有する大切さや共存への希望が感じられます。

菅隆紀さんは、「その場所」に拘った制作を行っています。ある時はアリゾナまで単身渡航。ナバホ族と交渉し現地の砂で地面に広く制作した作品は、完成し



鼎談風景(左から山崎さん、菅さん、前田さん、風間さん、萩尾さん)



懇親会の様子

た瞬間に全てが風とともに消えてしまう究極の儚さを含んだもの。異文化の知恵を借り、自らの殻を破るように、他者としっかり向き合い対話を繰り返します。「共通の何かを探し出すことが重要」と語る菅さんの活動は、人間の根源的な行為にアプローチし、自分以外の「世界」の発見を私達に示し続けています。

染色造形家の山崎和子さんは、友禅染をベースとしたシャープな形と色彩により、近年は国境を超えて広く活動し評価を得ています。海外での子どもを対象にしたワークショップの様子を見ると、山崎さんの温かさは多くの人に喜びを振る舞っているようです。「作品が自分の想いを超える新たなストーリーで誰かの人生に彩りを加えられたら、作者冥利に尽きます」と語る山崎さん。山崎さんにとってのパブリックの意義は、対局であるプライベートの中に潜在しているようです。

鮮明化したのは、世の中との向き合い方を考え続けることが大切で、それを体现する場がパブリックであり、各々の作品が多様な意味での「パブリックアート」だと

いうこと。狭義の既成概念が崩される話の連続でした。

萩尾さんの「豊かなデザインに溢れている現代において、みんなのための居場所と感じられるパブリックスペースが減っているのは、国際競争力の向上こそが都市再開発の真の目的とされるから」という要約は新鮮な視座でした。また個の場に公の要素を持ち込む「アートの推し活」に可能性があるという提言はユニークで、好きなアートを愛で、そして他者の「好き」を尊重するような多元的価値を社会に見出せれば、希望ある未来を信じられると思いました。

閉会後は懇親会を開催。「アートの推し活」話にも花が咲き、有意義な交流の場となりました。(副委員長 市村陽子)



日比谷公園と都心景観を一望する会場からの眺望

『市中の山居—共に創る時代へ—』発行にあたり:本研究の意義を振り返る

情報文化研究委員会

情報文化研究委員会では、現代の「市中の山居」をキーワードに調査研究活動を進め、これまでの成果をまとめた冊子『市中の山居—共に創る時代へ—』を2025年5月に発行しました。

2018年、初代委員長の故坂上直哉氏が「過密都市・東京に『市中の山居』をつくる事は可能か」という研究課題を掲げ、まずは土木、ランドスケープ、建築、アートという様々な立場の方に集まっていたとき、「都市の中であって人間性を取り戻せる居心地の良い空間をつくり出すことは可能か」というテーマで議論を交わしました。この座談会以降、「市中の山居」が委員会の主要な研究課題となりました。

「市中の山居」とは、室町時代後期の混沌とした戦乱の時代に生まれた概念で、町の中にいながら心静かに落ち着きを取り戻すことのできる「精神性の高い場所」を指す言葉です。委員会で調査・研究するにあたっては「市中の山居」を少し広く定義し、「都市の中で、人工的な場所であっても、文化的な考えのもと、何らの方策により自然とつながっているところ」あるいは「心を育み、自身を優しく包み込んでくれる風景」と考えました。

負の側面を併せ持つ自然は時として災害をもたらします。

安全で快適な生活の場となることを目指し、都市は長い歳月の中で様々なイノベーションが積み重ねられ、その結果、人と自然との距離は少しずつ広がっていきました。「災害時の対策を考えながら、日常はもっと自然と繋がって生活がしたい」という現代人のささやかな願いに応えることはできないものだろうか……そのようなことを、私たちは考え続けてきました。

「市中の山居」を探求していく中で、昨今の世界共通の持続可能な開発目標であるSDGsの中の「住み続けられるま



『市中の山居』表紙



調査対象 柏の葉キャンパス・アクアテラス



調査対象 越谷レイクタウン



調査対象 高ヶ坂松葉調整池 通称めだか池

ちづくりを」は、おのずと意識させられることとなりました。

都市と人間の居住地を包摂的、安全、強靱かつ持続可能にするためには、気候変動の緩和や災害を抑える「水と緑（自然環境）を考慮した街づくり」が喫緊の課題だということと重ね観る機会が多くありました。また、現代の「市中の山居」を実現している水辺の事例を見学して、植生や水系の「社会に開かれた自然環境」の魅力の中に、かつての「生活感」や「歴史文化」に加えて、感性に根ざした「社会ニーズの多様性」を見出すこともできました。

そうした「社会ニーズ」と環境の時代の新たな「価値観」とを重ねた多様な個性を、それぞれの「場所の文化性」として1つの全体像に描き出すことこそ、文化的な都市環境の創造を旨とするaacaの今日的なメッセージとして重要なテーマであると気づきました。

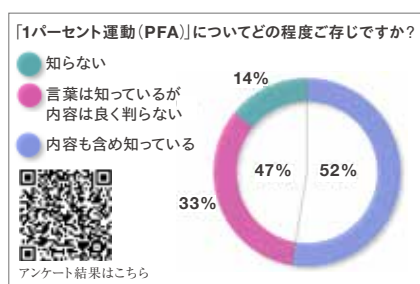
最後になりますが、坂上氏は、ステンレスアートの第一人者として広く知られた芸術家でした。その存在は唯一無二。いつも木曽の檜笠のフレームだけをヘアバンド代わりに被り、「やあやあ…元気かい…!」とひょうひょうと現れ、誰とでも垣根なくコミュニケーションを取ろうとされる、とても軽妙で気さくな方でした。われわれ若輩者の相談事にもまづもって肯定的で、「それやってみれば面白いかもよ」といつも目を輝かせながら温かい言葉をかけてくれました。

あの笑顔が、われわれ情報文化研究委員会の原動力だった、と今更ながら思えてなりません。(委員長 高橋圭太郎)

パーセントフォーアートを知ろう

パーセントフォーアート研究委員会

昨年末から年始にかけて(2024年12月25日-25年1月20日)、aaca全会員を対象に「日本建築美術工芸協会(aaca)の活動に関するアンケート」を実施しました。この中の「1パーセント運動(PFA)」の認知度を確認する質問に対し、およそ半数(47%)の方が「知らない/言葉は知っているが内容は良く判らない」と回答。これを受け、当委員会では、会員の皆さまにパーセントフォーアートはどのような制度で何に寄与するのか、をもっと知っていただくことが重要と考えました。本記事をパーセントフォーアートへの理解を深める機会にさせていただきたいと思います。



1. パーセントフォーアートとは

パーセントフォーアート(Percent for Art)とは、公共事業の建設予算の一部を芸術やアートに付加するために支出しようという制度です。一般的には、総建設費の1%前後を予算として割り当てることで、これにより建築とアート・芸術の融合を促進し、文化的価値を持つ公共空間の創出を目指します。

この制度は、アメリカで初めて導入され、その後、フランス、イタリア、スウェーデン、フィンランド、韓国、台湾など多くの国と地域に広まりました。現在でも、欧米・アジアを中心に様々な形で実施されており、地域ごとの文化的特性を反映したアート作品が公共空間に組み込まれています。

2. 制度の目的

パーセントフォーアートの目的は、単に公共空間を美しくすることにとどまりません。

1) 芸術文化の振興

公共空間にアートを導入することや空間創造にアーティストが協働することで、地域住民が日常的に芸術に触れる機会を増やします。これにより、文化的空間の価値向上が期待されます。

2) 地域のアイデンティティ形成

その土地の文化や歴史を反映したアート作品を設置することで、地域の特性やローカリティを強化し、アート作品が街のシンボルとなり、観光資源としての価値も高まります。

3) 建築との調和

建築と芸術・アートを一体化させることで、機能性と芸術性を兼ね備えた空間を創出します。公共施設の魅力が向上し、利用者の満足度も高まります。

4) アーティストの支援

一定割合をアートに割り当てることで、芸術家やデザイナー、職人などの創作活動を経済的に支援し、作品発表の機会を増やします。特に若手アーティストにとっては、作品を発表する重要な機会となります。これにより文化芸術の発展と新しい才能の育成が促進されます。

3. 海外の事例

アメリカ

1930年代にルーズベルト大統領のニューディール政策の一環として、「フェデラル・ワゴン」プログラムが開始されました。このプログラムは、アーティストの雇用創出と公共空間の美化を目的としていました。ニューヨーク市では、1977年に「1% for Art Program」が導入され、公共建築の1%をアートに充てることが義務付けられています。その結果、都市空間には数多くのアート作品が配置され、市民の文化的な意識向上にも寄与しています。

フランス

1951年に「1% artistique (アルティスティック)」制度が導入され、国が資金を拠出する公共建築プロジェクトにおいて、建設費の1%を美術作品の制作に充て

ることが義務付けられています。これにより、多くの公共施設に芸術作品が取り入れられ、アーティストの活動の場も広がっています。

韓国

1995年、韓国政府は「文化芸術振興法」を制定し、公共建築物の建設費の1%をアート作品に充てることが義務付けました。このプログラムは、韓国の都市景観を豊かにし、地域社会の文化的価値を高める役割を果たしています。また、多くのアーティストに創作の機会を提供し、文化産業の発展にも寄与しています。

4. 日本の状況と課題

日本では、海外のように国レベルで法制度として確立されてはいませんが、自治体や一部の公共事業で類似の取り組みが行われています。例えば、大型開発に伴う環境アートの導入や、官民協働による「まちづくり×アート」プロジェクトなどが増えつつあります。しかし、以下のような課題も残されています。

- ・制度としての認知度が低い
- ・予算確保や運用ルールの整備が十分でない
- ・継続的に作品をメンテナンスする仕組みが弱い
- ・法的枠組みの未整備

5. まとめ

海外の成功事例を見ると、パーセントフォーアートは建築と芸術の融合を促進し、豊かな公共空間を生み出す大きな可能性を秘めています。aacaに所属されている建築家、美術家、工芸家、デザイナー、そして関連する専門家の皆さまは、「パーセントフォーアート」の推進に大きく貢献できる存在です。皆さまが、このテーマについて関心を持ち、議論を深めていくことで、日本の建築・美術・工芸の未来をより豊かなものにしていくものと考えています。

(委員長 高橋章夫)

私が思うaaca的空間

アクティビティとの出会い

近田玲子 照明デザイナー[個人会員]



古民家再生プロジェクトを手掛けることになったのをきっかけに、いくつかの古民家を訪ね歩きました。どっしりとした大黒柱、曲がりを生かした太い梁と吹き抜けのある土間。いずれも重要文化財級の建物であったことから、書院づくりの座敷に見事な調度品が備えられ、手入れの行き届いた庭園が作られていました。

秋田県立博物館の分館旧奈良家住宅を見に行った時のことです。中門から続く土間から真っ白い煙が上がっているのが目に入りました。火事かとびっくりして駆け寄ってみると、土間の中央の薄暗い囲炉裏端に男の人が座って薪を燃やしているのがわかりました。古民家を害虫から守るため、開館と同時に毎朝こうしてボランティアで薪を焚き、煙を立ち上らせているとのことでした。

もう一つ、煙によってダイナミックな変化を遂げた空間に出会いました。中山道奈良井宿(長野県塩尻市)の上間屋資料館では、土間から上がった座敷の囲炉裏で湯をわかす薪の

煙に西陽が当たり、ハッと息を呑むような思いがけない煙の造形を目にすることができました。

古民家を訪ね歩く前は、埃を被った昔の生活の痕跡を見て、何か得るものはあるのか?と期待していなかったのですが、普段は目に触れない「煙を焚く」アクティビティに出会い、150年前の人と現代に生きる自分を「煙を見ている」という同次元で感じる事ができたと同時に、芸術性豊かな環境と景観の創造には、優れた建築・美術・工芸・デザインに加えて、日常生活から生み出されたアクティビティの存在が大きいことに気づきました。



ルイジアナ近代美術館

山本茂義 建築家(久米設計)[法人会員]



「美術館」ではあまりにも直截では?と思いつつ、私が取り上げたいのはこの場所です。これほどまでに芸術作品と空間が一体となっている関係はなかなか巡り合えるものではありません。窓越しの緑の借景までもがその演出として不可欠な要素といえます。

この建物は北欧デンマーク、コペンハーゲンから北へ向かった郊外、対岸にスウェーデンを望む海辺の高台に佇んでいます。周囲は閑閑な住宅地で、入口がとても質素だったのが印象に残っています。元邸宅だった敷地は広く、大小様々な展示室群が明るく快適な渡り廊下でつながっており、そのシークエンスの気持ちよさは唯一無二といえます。さらに外部のランドスケープと一体となった彫刻群、そこに憩う人々さえも美しい風景の一部に見えてきます。

ミュージアム建築には多くの傑作があるのも事実ですが、あくまで芸術作品が主役で展示空間はその背景という原則のようなものを感じます。展示空間とは競合しないロビーやレス

トランや中庭、そして建築としての外観が設計のテーマになっているからでしょうか。それらに引き換えここでは、いわゆる「建築」の主張が極めて希薄です。それでいて「世界一美しい美術館」の称号を得ている点も異色といえるでしょう。

建築と美術作品が共に主役のこの美術館、体感されていない方は是非足を運んでみてください。デンマークには「スモーブロー」というオープンサンドイッチの食文化もあり、これもお勧めです。北欧の午後の日差しを浴びながらのスモーブローとワイン、私もまた行きたくなってきました。



催事情報

〔令和7年度定時総会〕

・2025年6月11日〔水〕15時～

・会場：建築会館大ホール（東京・港区）

総会閉会后、東京・京橋発の芸術・文化拠点として注目を浴びる、「TODA BUILDING」に関する記念講演会を実施します。

・講師：河野利幸（戸田建設株式会社
建築設計統轄部 顧問）

・講演タイトル：京橋とともに活き続ける
新本社 TODA BUILDING

*16:40-17:55を予定

*CPD認定プログラム

*終了後に懇親会を行います

〔第8回BOX展〕

6月8日からaacaの公募展「BOX展」が始まります。今回のテーマは、「夢があつて、挑戦的で、思いが形に」。

会場には、30cmキューブの空間を使った作品の数々が展示されます。また、展覧会初日のギャラリートークでは、出展作家の方々から作品への想いや制作の秘話などを伺うことができます。

展覧会委員会では、本展がさまざまなジャンルの方々の交流の場となり、そこから生まれる新たなエネルギーが刺激し合う機会となることを目指しています。

ぜひ、お立ち寄りください。

会期：2025年6月8日〔日〕～14日〔土〕

会場：建築会館1階ギャラリー
（東京・港区）

・ギャラリートーク：8日〔日〕15時～

・オープニングパーティ：8日〔日〕16時～

・表彰式：14日〔土〕15時～

委員会だより

〔表彰委員会〕

AACA賞2025（第35回）

AACA賞2025の応募要項を公開しました。AACA賞では、協会の設立理念と目的にかなう、建築、美術、工芸、ランドスケープなど様々な分野が協力・融合して創造された文化的環境と美しい芸術的景観を実現させた作品を表彰しています。

◎選考委員

委員長 古谷誠章（建築家）

副委員長 可児才介（建築家）

委員

金箱温春（構造家）

近田玲子（照明デザイナー）

藤江和子（インテリアプランナー）

降旗千賀子（フリーランスキュレーター）

堀越英嗣（建築家）

松井龍哉（ロボットデザイナー）

宮城俊作（ランドスケープアーキテクト）

米林雄一（彫刻家）

和出知明（建築家）

◎募集期間

2025年7月1日〔火〕～9月8日〔月〕

◎第一次審査、現地審査

第一次審査にて公募作品の中から現地審査対象の入選作品を選考。

その後、選考委員が分担して作品を訪れ現地審査。

◎公開審査会：11月13日〔木〕

会場：建築会館大ホール（東京・港区）

対象作品の作者によるプレゼンテーション後、投票・意見交換を経て、受賞作品を決定。

◎表彰式：12月3日〔水〕

会場：建築会館大ホール（東京・港区）

「協会設立記念総会」にて表彰。

応募要項：

<http://www.aacajp.com/award/competition.html>

編集後記

本号では、aacaが目指す「多分野が協働して創る健康で文化的な空間」のあり方のヒントを掴むため、その方向性を体現している協会賞・AACA賞について紐解いてみました。

AACA賞2024受賞作・ポーラ青山ビルディングについては、空間にアートを溶け込ませるプロセスを語っていただきました。本作の実現はクライアントのアートに対する深い理解があつてこそ。取材に丁寧に対応してくださった横手社長に、心より感謝申し上げます。

特集の冒頭では、古谷選考委員長と東條会長に受賞作品を中心に語っていただきました。語られた内容は、あくまで個人の考えであり選考委員11人の総意ではなく、言わずもがな、次のAACA賞受賞の攻略を示しているわけではありません。しかし「次なるaaca的なもの」「新しい時代のAACA賞のイメージ」の方向性の兆しや出現への期待を強く感じる内容となりました。

今年のAACA賞2025では、どこかの誰かに、次なる「新たなもの」を具現化した姿を提示いただき、バブル以降行き詰まっている建築と美術の状況を打破する道筋、aacaの新しい方向性を見せてもらいたいですね。（勝山里美）

ニュースレター配信登録について

協会が主催するイベントや会員活動の情報をお届けする「ニュースレター」。会員に限らずご希望された方に、随時配信しています。

配信を希望の方は、件名に「ニュースレター配信希望」と記したメールを、事務局までお送りください。送信いただいたメールアドレスに、ニュースレターをお送りします。
aaca事務局：gijiroku@aacajp.com

憲章

日本建築美術工芸協会は、故芦原義信氏が求めた文化的都市の創造を实践する為に、建築・美術・工芸に関わるあらゆる分野の人々が集まり、連携し、交流し文化と芸術性の追及と情報の発信を行い健康で文化的な空間創造に寄与する。

1. 優れた文化的な都市環境の創造を追求する。
2. 地域の環境と文化を尊重しさらに創造を求める。
3. 芸術文化の重要な担い手として社会の発展に努める。
4. 建築・美術・工芸が一体となった総合的な芸術空間を創るよう努める。
5. 文化的な空間創造のための「1パーセント運動」を提唱する。

理念

美しくゆとりある環境の街づくりを！

日本はこの60数十年、経済向上をめざして住宅から都市の建設にいたるまで、著しい発展を遂げて来ました。しかし、一方では市民にとって潤いを欠くような環境も多く見られるようになり、社会の文化育成という面を考えると実に憂慮すべき問題が生じてきています。

このことは未来に向けて空間創造に関係する私どもにとって、十二分の配慮が払われねばならないことであります。

まず、そのために建築に関わる美術、工芸、並びにその製作を支える人びとが連帯し、交流の場をつくり、社会のニーズに応えるよう文化と芸術性の考究と関連情報の収集・利用を促進し、さらに海外との情報交流をはかることが求められております。

aaca|2025.05|no.101

発行日:
2025年5月28日
発行:
一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20 建築会館6F
TEL 03-3457-7998
FAX 03-3457-1598
URL <http://www.aacajp.com>
E-Mail info@aacajp.com
編集:
広報委員会
委員長・編集長 勝山里美
副委員長 中村弘子
委員 金原京子 齋藤潮美 竹生田正
津下庄一 望月純子 森田高年
山崎和子
記事執筆:
1-2ページ 吉原佐也香
3-5,6ページ 勝山里美
表紙・フォーマットデザイン:
矢萩喜從郎

表紙に向き合うと

19世紀になって鉄材と板ガラスを使用して設計できるようになると、建築の印象を一変させる力がでてくる。建物と建物の間に高いガラス屋根を掛け、何の障害もなく天空を見られる大空間のアーケードと映るように……。歩行者にとって、外部であった筈の領域が、アーケードになったことで、一瞬、内部となって主要な空間になったように感じられ、まさしく主客逆転を得意とする演劇のトリッキーな空間に入ってしまった気がしてくる。

この写真は、ミラノのドゥオーモ広場の北に位置し、ミラノスカラ広場へ通じているエマヌエーレ2世にちなんで名付けられたヴィットリオ・エマヌエーレ2世のガラリア(イタリア語でアーケードの意/1865-77年)。それは、イタリアの建築家のジュゼッペ・メンゴニに依って設計されたものだった。

わたしが世界中に数多くあるアーケードで、ミラノのガラリアと同じくらい感動したアーケードがある。それは、モスクワの中心をなす赤の広場を挟んだクレムリンの前にある長方形のグム百貨店(1893年)のアーケード。1階から4階迄吹き抜け空間になっていて、その上、天空にも続くように感じる光景は圧巻そのものと感じる。

ミラノ工科大学に入学し建築を専攻した、ルーマニアの画家、ソール・スタインバーグが、ミラノのガラリアを描かずにはいられなくなり、それが代表作品の一つになったように、アーケードは、創作者を掻き立てずにはおかぬ魅力溢れた大空間に違いない。

(矢萩喜從郎)

ポーラ青山ビルディング



撮影: 橋瀬 友将

虎ノ門ヒルズステーションタワー



撮影: エスエス東京



久米設計

〒135-8567 東京都江東区潮見2-1-22 TEL03-5632-7811
東京 札幌 東北 横浜 中部 京都 大阪 九州 沖縄 上海 ハノイ ホーチミン シンガポール

KUME
SEKKEI



輝く瞳の先にあるもの。

何か大きなものができる。

何か新しいものができる。

何か素敵なものができる。

そんなワクワクを

私たちは、いつも、いつまでも

忘れないようにしたいと思う。

子どもたちに誇れるしごとを。

SHIMIZU CORPORATION
清水建設



TOKYO TORCH Torch Tower

 三菱地所設計
Mitsubishi Jisho Design

www.mjd.co.jp

ゆるく仕切って、しっかりつながる。チームのためのよりどころ。



Lives Post Beam
【ライブス ポスト ビーム】
多様な空間を創出する
“ルーム・イン・ルーム” ツール

OC Portable battery
【オーシー】
電源を持ち運び、好きな場所で
自由に働けるポータブルバッテリー

人を想い、場を創る。

株式会社オカムラ

<https://www.okamura.co.jp/>

OKamura

